

**大学文書館へ
行こう**

**第15回
「牧野富太郎つながり」**

北海道大学大学文書館 井上 高聡



札幌農学校入学時の廣井勇 (1877年8月)

今放映中のNHK朝の連続ドラマ「らんまん」の主人公横野万太郎は、植物学者牧野富太郎（一八六二〜一九五七年）をモデルとしています。牧野富太郎は土佐藩の佐川村（現在の高知県高岡郡佐川町）の裕福な商家に生まれました。独学で植物学を学び、洋学・西洋科学にも触れています。一八八四年に上京し、東京大学理学部植物学教室に出入りするようになり、後に助手・講師となります。日本各地で植物調査・採集を行ない、多くの新種を発見し、命名しました。一九四〇年に編集・刊行した『牧野日本植物図鑑』をはじめ、多くの研究成果を残しています。戦後には日本学士院会員となり文化勲章も受章した、日本の植物分類学の泰斗です。

さて、牧野富太郎は、札幌農学校とちよっとした縁があります。

同郷、同い年、同窓の廣井勇

札幌農学校第二期生廣井勇（一八六二〜一九二八年）は、牧野と同郷、同い年、学校では同窓でした。実は、朝ドラでも少年時代の廣井らしき人物が登場しています。

廣井は、その後、東京外国語学校、工部大学校予科を経て、一八七七年九月に札幌農学校へ入学します。卒業後、留学を経て、札幌農学校教授となり土木工学を講じる一方、小樽港、函館港、釧路港をは



東北帝国大学農科大学教授時代の宮部金吾 (1912年)

じめとする道内の築港工事などに携わります。一八九九年には東京帝国大学工科大学教授に転出しました。牧野と同じ東大に在職していますが、残念ながら両者の交流を示す資料はありません。同郷の幼馴染みが、全く違う経路をたどり、植物学と土木工学という異分野の第一人者として、同じキャンパスで研究に勤しんだというのも、面白い巡り合わせです。二〇二一年、二人の故郷佐川町では有志が「廣井勇銅像を建立しました。牧野の資料を展示する「牧野富太郎ふるさと館」の程近くです。

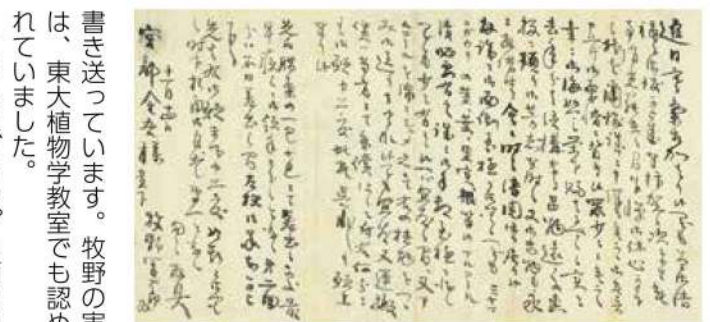
同学の士、宮部金吾

廣井勇と同じ札幌農学校第二期生宮部金吾（一八六〇〜一九五一年）は、植物学研究を通じて、牧野富太郎と生涯にわたる付き合いがありました。宮部は札幌農学校卒業後、一八八一年から二年間、東大植物学教室に学んでいます。当時、植物学

教室には矢田部良吉教授の下、松村任三などのスタッフがいました。東大植物学教室にやって来た牧野とすれ違うように、宮部は北海道に戻り、留学を経て札幌農学校教授となります。

書簡に見る植物学者の姿

大学文書館は、牧野富太郎が宮部金吾に宛てた六十通以上の書簡を所蔵しています。最初の書簡は一八九二年一月五日付けです。一時帰郷していた牧野が、東大植物学教室では矢田部教授と不仲になってしまっていることなどを書き送っています。初期の書簡では、随分と東大植物学教室への不満をぶちまけています。教授はじめスタッフの俗物根性・権威主義、待遇の悪さ、設備の不十分さなど辛辣です。小学校を中途で終え、自力で植物学研究の道を開いている牧野は気骨のある曲者です。アカデミズムの中でエリート教育を受け、洋行経験もある植物学教室のスタッフとは、ソリが合わないのも頷けます。



宮部金吾宛て牧野富太郎書簡 (1894年11月15日)

かつて東大植物学教室に在籍して事情に通じ、札幌という遠方にはいた宮部は、牧野にとって愚痴をこぼしやすい相手だったのかも知れません。一方、牧野と不仲であった松村任三は、宮部に宛てた一八八七年二月七日付けの書簡で、「牧野はフロラにかけては中々のやり手だと

書き送っています。牧野の実力は、東大植物学教室でも認められていました。こうしたゴシップも面白いのですが、牧野が宮部に宛てた書簡の多くは、植物学研究に関する内容です。採集した植物の遣り取りをし、自説への見解を求め、疑問点を質し、研究経過を報告し、お互いの研究を評価・激励しています。牧野が宮部に宛てた最後の書簡は、一九四八年十一月十七日付け、宮部八十八歳、牧野八十六歳です。「干島笹」が本州に広がり、竹稗の太い「根曲がり竹」になったのでは、との推論に対する意見を求めています。八十寿を遙かに超えても、二人の学匠の植物学談議は尽きることがありません。